

(題字は初代学長 山田守英氏)

第 148 号

平成24年 4 月 6 日

編集 旭川医科大学
発行 教務部学生支援課



「春陽」(常盤公園)

(写真撮影：心理学 教授 高橋雅治)

平成23年度学位記授与式 学長挨拶…吉田 晃敏… 2	回 想……………中村 正雄… 16
医学科第34期生に贈る言葉……………原渕 保明… 5	14年近い講座主任としての活動を振り返って
看護学科第13期生を送るにあたって	……………伊藤 亮… 17
……………加藤千津子… 6	定年退職にあたって……………北村久美子… 18
卒業にあたって……………石井 大介… 7	海外ボランティア診療に参加して…皆野絵里奈… 19
卒業にあたって……………黒嶋 健起… 8	……………黒木 香織… 20
卒業にあたって……………福澤 征爾… 9	合同成果発表会…………… 22
卒業にあたって……………布宮ゆり恵… 10	各種保険について…………… 23
卒業にあたって……………増田 彩… 11	平成24年度日本学生支援機構奨学生募集について … 23
一年間を振り返って……………矢口 陽介… 12	平成24年度看護学科学生に対する奨学資金の貸与について … 23
一年を振り返って……………森 勇喜… 13	授業料未納による除籍について…………… 24
一年間を振り返って……………小谷 理恵… 14	学生団体の「継続届」「設立届」の提出について … 24
一年間を振り返って……………西尾 和音… 15	インフォメーション…………… 24



平成23年度学位記授与式 学長挨拶

志ある若者たちの、新たな挑戦・ 旅立ちに対して、心からの贅辞を

学 長 吉 田 晃 敏

本日、3つの学位記授与式（卒業式）を挙行し、卒業生、ご父母の皆さんと感動を共有出来ました事を大変嬉しく思います。

始めに、医学科第三十四期生92名の皆さん、並びに、看護学科第十三期生69名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

皆さんを今日まで、育てて来られたご父母の皆様のご感慨もひとしおと思い、重ねてお祝いを申し上げます。

学年担任をはじめ、教職に当たられた先生方、そして、日頃から医学科や看護学科の学生諸君と接してきた職員の方々も、本当にお疲れ様でした。

また、医学博士の学位を取得された15名の皆さん、そして、看護学修士の学位を取得された11名の皆さん、心からお祝いを申し上げます。

皆さんの優れた研究業績と、指導教員と苦勞を共にした努力に対し、深く敬意を表します。努力で勝ち得た学位を武器に、より高いレベルの医療人へと、更に成長される事を祈っています。

さて、この3月で、東日本大震災から1年が過ぎました。復興は、まだ道半ばであり、福島第一原発の事故に伴う放射線の影響への不安は、依然として払拭されてはいません。

この1年、皆さん一人ひとりが、医療人として単立つ自分ができる事は、一体、何なのだろうか、それぞれの場で考え続けたのではないのでしょうか。

命の重みと、はかなさ、人と人との繋がり、生きる事の尊さ、そして、残された苦しみなど、未曾有の震災は、今も私達に人間の存在の根源にかかわる

問題を、問い続けています。

一つの命は地球よりも重いと言われながらも、現実には、助かるはずの命が失われています。

被災地だけの話ではありません。北海道の話です。地域格差は拡大し、医師は、今も不足しています。

医療はどうあるべきか。国民の命を守るために、「何をすべきなのか」……。

今から39年前、この重い問いかけに対する一つの答えとして誕生したのが、私達の旭川医科大学でした。

震災という重い時代体験を前に、皆さんが問い続けた様に、私もまた、当時、旭川医科大学の一期生として、医療の在り方、命との向き合い方を考えながら、この大学の門をくぐりました。

以来39年。医師不足は解消したでしょうか？ 答えはノーです。

医療格差は解消したでしょうか？ 答えはノーです。それどころか、問題は、ますます深刻となっています。

今や、道内でも至る所で、診療科の休診が相次ぎ、北海道第二の都市、ここ旭川市でさえも、現実に医師が足りないのです。国が平成16年度にスタートした、新たな研修制度も、大きな影響を与えています。

一方、看護師不足はさらに深刻です。もはや慢性的とも言える看護師不足状態が、全国で続いています。

このような、正に深刻な「医療者不足」を前に、国はついに、医師増員へと、大きく舵を切りました。その結果、いまや、年間4,400人ずつ医師の数が増

えて、20年後の日本は、今とは逆に、世界でも1、2を争う医師大国となってしまうのではないかとも言われています。20年後です。

医師不足と医師余り。このような矛盾する情報を耳にする度に、皆さんはきっと、自分はいったいどうすればいいのかと、将来に対して、漠とした不安を抱いているかも知れません。

しかし、皆さん、「今」この瞬間の現実を見つめて下さい。

被災地の復興は、10年先でさえも、まだ続いているかも知れません。

全国各地で、今も、日々医師が求められ、看護師が必要とされています。

医師が不足しているのが、過剰だといわれようが、最後に問われるのは、「志」です。私は、いくら医師が増えても、医療不足は解消しないと思っています。

志ある医師が増えない限り、医療格差は拡大し続けるでしょう。

私達の旭川医科大学は、まさに、その「志」…、地域医療に貢献せんとする、「志」ある医師や看護師を育てる事を目的に生まれた大学です。そのために出来る事は何かを、常に考えながら、私自身、旭川医科大学の改革を進めて来ました。

皆さんの在学中に実現した事を、もう一度思い出してみましょう。一つは、「ドクターヘリ」です。ヘリポートを本学の敷地内に造り、また、搭乗者も医師7名、看護師3名で、ローテーションを組みながら運航しています。

そして、北海道からの要請をうけ、立ち上げる事を決意した「救命救急センター」も、皆さんの在学中に実現しました。病床18床、集中治療室2床。医師が15人、看護師35人という強力な布陣でスタートした、救急医療・最前線の現場が、新たな救命救急医・看護師養成へと繋がっています。

また、「デイ・サージャリー室」を2室造った事

も、大きな前進です。これまで、年間6,300件程の手術を11の手術室で対応して来ました。この数字自体、本学のような600床規模の国立大学病院では、飛び抜けた手術件数でしたが、今後、デイ・サージャリー室効果で、手術件数はさらに大きく伸びて行くでしょう。

昨年の10月には、本学で初めて、「生体肝移植手術」を行いました。「先進医療」を地域へ提供することを目指している本学にとっては、大きな一歩です。

看護師不足の背景にある、職場環境の改善にも取り組みました。本院に勤務する看護師に対しては、本院外での研修費用の全額を、大学が負担していますが、これは、他の国立大学病院では、例がありません。

また、女性スタッフが安心して出産、育児、介護にも取り組めるようにと、「復職・子育て・介護支援センター」も設置しました。

これらの施策の積み重ねにより、今年2月に、「働きやすい病院評価」(ホスピレート)と言いますが、この名誉ある認定を得ました。この認定は、かなり厳しい第三者機構が審査し、道内で初めて、東日本の国立大学病院としても、初めてです。多様な勤務形態があるか、24時間の院内保育所、病後児保育施設の設置、復職支援プログラム提供や、バックアップナースシステム、などが評価されました。

加えて、本学では医師の待遇改善にも取り組みました。「特別手当」です。病院で診療に従事する医師、すなわち、初期臨床研修医、医員、助教、講師、准教授、及び教授に至るまで、全職種を網羅して、給与のアップ、特別手当の支給に踏み切りました。これは、全国の国立大学でも初めてです。中でも、初期臨床研修医に対する支給額は、奨学金も含めると、月額50万円となり、これは、国立大学病院で最高額となります。

それから、初期臨床研修医は、同時に、本学の

学院博士課程にも進学出来る様に、制度を改正しました。これは、今年4月からの適用となり、さっそく、皆さん方の中で研修医になる方の数名が、本学の博士課程に進学します。

これら、数々の制度改革を通じて、私が目指して来たものは、地域医療、とりわけ、ここ北海道の地域医療に貢献できる「人材育成」でした。

果たして、目的は達成されたのでしょうか。その答えは、今日、ここにお集まりの皆さん、一人ひとりです。

皆さんがこうして、大きな節目を迎える事が出来た事が、まず私は、ただただ嬉しく、胸にせまるものがあります。自分自身の努力をたたえ、どうか胸を張って、新たな一步を踏み出して下さい。

私自身の志は、遠隔医療という形で、一つの実を結びました。

まだインターネットさえ普及していなかった時代から、私を一貫して支え続けたものは、住んでいる場所にかかわらず、どこでも、必要な時に、必要な医療を受けられる環境を創りたいという思いです。失明寸前だった離島の患者さんを遠隔診察し、もう一度光を取り戻すお手伝いをさせて頂いた時の喜びに接した時、医師である幸せをかみしめました。

最近では、中国政府から「遠隔医療の推進に力を貸して欲しい」との要請を受け、3月から、本学の遠隔医療センターと、中国の、北京、上海を始め、4つの病院を繋ぐ、本格的な医療支援が始まっています。

しかしながら、私自身の志は、まだ、道半ばだと思っています。

さて、皆さんの「志」は、何でしょうか？

医療人としての新たなステージを前に、もう一度、自分自身の胸に、「自らの志」を、問いかけて下さい。

大学に残って下さる皆さんとは、これから新しい

ステージで、地域医療のため、大学の改革のため、世界の医療のため、共に頑張ってください。

大学を去る皆さんとは、将来、更なる改革を成し遂げたこの母校で、共に働ける日が来る事を、心から願っています。

これからの道のりは、学生時代より遥かに長くなります。自分ではまっすぐ歩いているつもりでも、たとえば、砂浜に残った足跡を振り返ってみると、その道は、時に、大きく曲がっています。自分にとって、何が良かったか、何が悪かったか…。その時は、判らないでしょう。

出来る事は、ただ一つ。

昨日の事でも、明日の事でもなく、ただひたすらに、「今」を、精一杯生きる事です。

その時の判断・選択が、自分自身の転機だったと気づくのは、時には何年・何十年も後かも知れません。それが人生だと思います。

志ある若者たちの、新たな挑戦・旅立ちに対して、心からの賛辞を込めて、ここに学長の告辞といたします。

道に迷った時は、いつでも大学の門を叩いて下さい。

旭川医科大学は、いつまでも、皆さんのための、母校です。

卒業、おめでとう。

平成24年3月23日



高い志、熱い情熱、暖かい思いやり

— 医学科第34期生に贈る言葉 —

平成23年度医学科第6学年担当
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 教授 原 洵 保 明

医学科第34期生の諸君、卒業おめでとう。晴れの門出を心からお祝い申し上げます。私も本学の4期生であり、同窓生そして医師の先輩として、ひと言はなむけの言葉を贈りたいと思います。

諸君は、この4月から社会人として医療に従事することになります。医師としての第一歩を踏み出すにあたり、「高い志、熱い情熱、暖かい思いやり」を持ち続けることを望みます。これから一人前、一流の医師になるためには、これらは欠くことのできないことであると私は思います。この言葉をいつも心に留めて、医師としてこれからの人生を歩んで欲しいと思います。

「高い志」を持ち続けよ

医師としての使命は「目の前にいる患者さんの苦痛を和らげる、患者さんの生命を守ること」であることは言うまでもありません。勿論それは医師として重要なことですが、それに加えて、グローバルな視野から「高い志」を持ち続け、「社会に貢献する、医学の発展に貢献する」ということも医師としての重要な使命です。諸君の数多くが受験の面接試験の際に、「将来は地域医療に貢献したい」という抱負を述べてくれました。このような「社会に貢献する」という初心を今後も忘れないで欲しいと思います。

また、「医学の発展に貢献する」というのも医師としての重要な使命です。諸君の大部分が臨床医を目指しているわけですが、たとえ臨床医であっても医学研究に励むことが望まれます。ひとりひとりの研究成果は小さなものであっても、その積み重ねによって医学はこれまで発展し、そして今後も発展するのです。研究のテーマは日常の患者さんを診療する上での疑問や悩みから見つかります。一流のリサーチマインドを持ち続けることが、一流の臨床医になることに繋がります。若い臨床医の日常は限りなく忙しい毎日ですが、これらの「高い志」をいつも心に持ち続けて下さい。

「熱い情熱」を持ち続けよ

次に諸君に望みたいことは、仕事に対して熱い情

熱を持ち続け、何事にも怯まずに努力して欲しいことです。患者さんの病状は、担当する医師の情熱によって左右するといっても過言ではありません。病状が悪化した患者さんを診るために、何日間も病院に寝泊まりすることに怯まないで下さい。また、研究成果も研究者の情熱しだいで、大きく左右します。夜中まで実験を続けることに怯まないで下さい。そのためには、今では死語になりつつあるのかもしれませんが、「自己犠牲の精神」が必要かもしれません。しかしながら、このような努力が報われずに残念な結果に終わることも少なくありません。その悔しさをバネに情熱を一層熱くして、怯まずに努力を続けて診療、研究に取り組んでいただきたいと思います。患者さんを何とか治したいという情熱は、新たな治療法を開発する研究に向けての情熱に繋がっています。

「暖かい思いやり」を持ち続けよ

そして、最後に諸君に望みたいことは、周りの人々に気配りと思いやりを持って行動して欲しいことです。これは患者さんに対しては勿論ですが、患者さんの家族に対しても同様です。加えて、現代の医療・医学は医師のみならず看護師、コメディカル、クラーク、事務官、秘書など数多くの人々によって成り立っていることは言うまでもありません。医師はそのリーダーとしての資質を持たなければなりません。その資質の中で最も重要なのが、「暖かい思いやり」と気配りを持ち続けることです。医師という職業柄、周りからちやほやされることもこれからあるかも知れません。しかし、それは若い諸君たち自身に対してではないことに気づいて下さい。謙虚な気持ちを持って、おごり高ぶることなく、暖かい思いやりを育むよう努力することを望みます。

以上、諸君の輝かしい未来と将来の活躍を祈念して、贈る言葉とさせていただきます。卒業おめでとうございます。



看護学科第13期生を送るにあって

看護学科第4学年担当
看護学講座 教授 加藤 千津子

看護学科第13期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんの入学からの4年間の努力と研鑽に敬意を表し、心からお祝いを申し上げます。

平成20年4月4日に行われた入学式において、皆さんは看護学を学ぶ仲間として出会い、期待と緊張の中で4年間の大学生活を始めた日のことを、昨日のように思い出します。新入生ガイダンスおよび「かぐらおか」で、「考えること」「自分の頭で考え、自分なりのものの見方や考え方をもつこと」と、「自ら学ぶ力を培うこと」の重要性についてお話ししましたが、皆さんの4年間の大学生活はいかがでしたか。

また、看護学を学ぶにあたって、以下のようにも書きました。看護はヒューマンケア、すなわち人権の尊重を基盤とした健康な生活への支援であり、正確な知識・技術と豊かな人間性に基づく行為が求められます。そして、看護職の活動は人間や人間の生活に深く関わりながら、対象者の人として生き方・希求・価値観にそって、その人の健康生活と自己実現を支えるという特徴があります。その過程で個別的状况に応じた深い人間理解と人間的・倫理的な判断力が問われます。これらの基盤となる豊かな人間性を育むためには教養を深めることが重要で、それは広い視野での見識や多様な価値観の育成につながります。これらを大学の4年間の講義や実習という体験、課外活動などを通して学んできましたが、今後は皆さんが職業人として日々の看護実践のなかで、より深化させていくことになるでしょう。そのためには対象者に真摯に向き合うことが基本になり、その対象者との関わりのなかから多くの学びを得ることと思います。そして、人間には誰でも「(たとえ病んでいても)輝く瞬間がある」と言われ、その輝きを重ねることができるようアプローチができれば…と思います。今まで学んできた断片的な知識が統合されて「真の理解」につながり、「わからなかったことがわかる」という喜びも体験

し、その喜びが次の学びにつながり看護を続ける力になると思います。

医療崩壊などにより医療体制の再構築が叫ばれて久しい昨年3月11日、私たちは未曾有の東日本大震災を体験し、医療を取り巻く情勢も大きく変化してきています。それに伴い、看護職への期待や要求も変化し、今まで以上に「確かな知識や技術に裏付けされた思考力」や「問題解決能力」が求められ、チーム医療の重要な構成員として、自律・自立した専門職としての役割への期待が高まっています。NHKの「プロフェッショナル仕事の流儀」という番組で、ある専門看護師が「プロフェッショナルとは、ものごとの本質を追求する人であり、できる人である」と述べていましたが、生涯にわたり学び続ける存在であることが専門職である看護職には課せられています。皆さんが看護の基礎教育で学んだことは看護の骨格になる部分であり、ほんの一部分です。看護は実践の科学であり、看護職としてスタートラインに立った皆さんは、今後の看護実践を通して専門職として成熟していくことが期待されています。まず、最初の3年間は看護の基礎教育で学んだ看護学を礎にして、看護実践の学びのなかから自分の看護の力を着実に培ってください。そして、看護職の活躍の場は拡大してきていますので、志を高くもって、自分の可能性を信じて、結果や評価を恐れず、果敢にチャレンジする勇気をもって前進してください。

最後に、職業人としてスタートする皆さん、これからの人生は平坦な道だけではなく、学生時代には体験したことのない困難や挫折に出会い悩むことも多いかもしれません。4年間ともに学んだ仲間のネットワークを生かし、「絆」によって乗り越えてください。看護学科13期69名の皆さんのご活躍をお祈り致します。

孔子の言葉「知らずを知らずとせよ、これ知るなり。」



卒業にあたって

医学科第34期生 石井大介

2011年2月、第二外科でポリクリ中のことです。膵頭部癌の患者さんに対して、膵頭十二指腸切除術が行われていました。手術暦のある患者さんで、ひどい癒着がありましたが、先生方は慎重に手術を進めていました。病巣部の摘出間近になった時、多量出血が起きました。出血部の修復を試みますが、なかなか出血コントロールができませんでした。門脈、脾静脈などの損傷があり、みるみる間に出血量は増加していきました。まず、門脈をクランプし、出血をコントロールしながら、血管損傷の修復を試みましたが、損傷部が大きく、なかなかうまくいきませんでした。さらに門脈クランプによって、上腸管膜静脈や下腸管膜静脈などの還流が滞るため、腸管のうっ血・浮腫が私の目でも明らかでした。これ以上、門脈クランプを続けての修復は無理と判断した先生方は、門脈から総腸骨静脈へのバイパスを新たに作り、静脈還流を維持しようとしたのです。透明のチューブの中を赤い血液が流れ出した瞬間の映像は、今でも鮮明に頭の中に残っています。バイパスによる静脈還流が維持できた段階で、次々と血管が修復されていきましたが、門脈のみ損傷部を切除したため、長さが足りなくなってしまう、外腸骨静脈からグラフトを採取することとなりました。グラフト採取時及びグラフト縫合時、私は鉤引きに入らせてもらいました。そして血管修復が無事に終わった時、古川教授は私の前に血だらけの手を差し出し、



「お疲れ様」と強く握手して下さいました。その後、手術は終了し、患者さんは無事に退院されました。ImpressiveかつExcitingな出来事でした。

この出来事は、6年間の中で鮮明に覚えている出来事の1つです。6年、経ってみれば早いと感じますが、先を見れば長い日々でした。色々なことを学び、色々なことを体験してきました。目の前の事を一つ一つクリアしようとして頑張ってきました。その中で同期や部活の仲間、家族が大きな支えでした。彼らがいなかったらこそ、ここまで来られました。

4月から旭川で初期研修を始めます。沢山の感謝のある旭川医科大学がもっと魅力ある、もっと誇りの持てる大学になるように、この先尽力できたらと思っています。本当にありがとうございました。





卒業にあたって

医学科第34期生 黒 嶋 健 起

「パソコンのモニター越しに、4桁の数字を見た。自分の何かを認められた気がしたあの瞬間から、早いもので1年という月日が流れようとしています。」

この冒頭で始まる文章をかぐらおかに寄せたのは、私が1年生の終わりのことでした。まだ旭川への漠然とした印象と、おそらく期待のみに胸をいっぱいにしてたあの日。もう6年という歳月が過ぎていきました。この6年間で、私の胸中は様々な感情で埋め尽くされていきました。それは、決して喜ばしいものばかりではなく、時には締め付けられるような辛いものもありました。しかし、その1つ1つが、今の私の糧となり、不必要なものは存在しなかったのだと、このあっという間に過ぎていった6年間で振り返り感じています。

どの思い出を振り返っても、大きかったのは出会いの力だと思います。私はバンド活動をやっていたのですが、同じバンドで活動してくれた同期と後輩、他大学の学生、ライブハウスのスタッフの方々、街のおじさん達・・・挙げていくとキリがない程の出会いがありました。旭川という地の中でも、さらに狭い世界で生きていた私にとって、ここで出会った方々の個性溢れる価値観は財産です。杯をかわし、

朝まで飲み明かす。字面で見ると仕様もなく聞こえますが、学生ならではの貴重な経験でした。きっと月日が経つにつれ、セピアになりながらも、キラキラと輝くのではないのでしょうか。

5年生になり病院実習で現場に出ると、第一線で活躍されている先生方、病床にふせているたくさんの患者さん達に出会いました。この時の経験が、今の私の将来の道標になっていることは間違いないと思います。私も幼少期に入院することが多く、患者さんの気持ちが伝わりすぎて辛いこともありましたが、その中でしっかりと患者さんと向き合えたことは、私の自信にもつながる経験でした。

簡単に振り返りましたが、やっと6年。ここがスタート地点です。6年前に私が感じた、「自分の何かを認められた気がした」という感覚。その何かを、これからの医師としての人生の中で、見つけていけたらと思います。ありがとうございます。





卒業にあたって

看護学科第13期生 福澤 征 爾

今から約二年前の四月、さまざまなサークルから熱烈な勧誘を受けて始まった旭川医科大学での学生生活のスタート。それが今も記憶に新しく思いますが、時の流れは早く、さまざまな方々のたくさんのご支援のもと、今回無事卒業を迎えることができました。

思い起こせば、編入での二年間という期間はとても短いものでした。当時、看護師として就職しても差し支えない中、あえて旭川医大に編入することは、新たな友達との出会いといった楽しみな部分と、そのような中でうまくやっていけるのかという不安な部分とが入り混じった気持ちがあったように思います。しかし、そういった不安な気持ちは入学し、すぐに友達ができるとともにすぐになくなったのを覚えています。

医大でのカリキュラムは、これまで培ってきた「看護とは」という考えを、よりさらに深めていくものでした。それは、一人ひとりの講師の先生方から熱心にご指導・ご鞭撻をいただいた賜物であると感じています。

旭川医大の学部生とは、サークル等と一緒にだけ

れば、深いかかわりはなかったように思います。しかし、グループワークや授業などでの姿勢・考え方を知ることで、一人ひとり考え方がしっかりしているな、という印象を持ちました。それと同時に、自分の考え方や価値観にも良い刺激を与え、見習わなければならないというように感じました。

一緒に入学した編入生は、数少ない同期ということで一緒に行動する機会が多かったように思います。また、それぞれの学校で学んできたことを見せる機会も多く、戸惑いもありましたがそれよりも学びが大きかったことを覚えています。これらの学びは、これからの自分の看護人生にいかしていきたいと思えます。

最後に、旭川医科大学で学ぶにあたり、熱心にご指導くださった先生方、いろいろな面でお世話いただいた事務の方々、つらいときも支えてくれたり楽しいことを共有しあった友人、家族に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。





『卒業』

看護学科第13期生 布宮 ゆり恵

国家試験を終え、この原稿を書いていると、入学した4年前の春がついこの間のように感じ、もう卒業してしまうんだなと思うと少し寂しい気持ちです。同時に4月から社会人として、幼い頃からの夢であった助産師という専門職に就くことに対し、不安や期待が混ざり合い、胸が高鳴っています。

大学生活は本当にあっという間に感じ、将来にわたり決して忘れることのできない4年間となりました。授業や実習などを通し、学年が上がるにつれ専門職として自覚や責任感を持たなければならないという気持ちが強くなりました。今までの自分の考え方を見つめ直し、自分を変えていかなければならないと感じ、悩んだ時もありました。実習などでは決して器用ではない私はみんなよりも少し習得が遅いように感じましたが、皆についていけるように最後まで頑張ろうと決心し努力しました。楽しいことや辛いこと、様々なことがありましたが、いつも私のまわりには仲間がいて、将来医療職という同じ目的

を持つ仲間と切磋琢磨しながら苦楽を共にできたことは私にとって、とても得るものが多く、充実した大学生活を送れるということができたと感じています。

勉強以外にも同期の友人と旅行に行ったり、実習や国試勉強の息抜きに飲み会やおいしい物を食べに行ったりと楽しかった思い出がたくさんあります。部活動では、バドミントン部に入部し、大会で色々なところに行ったり、他大学にも友達ができ、飲み会などをしたことなどは、一生の思い出です。

このように4年間健康に楽しく充実した学生生活を送ることができたのも今までお世話になった大学、熱心に色々なことを教えてくださった先生方、お互いに支えあった同期の仲間、応援してくれた部活の先輩、後輩、たくさんの人の支えがあったからだと心から思います。そして、いつも私の味方となってくれた両親には本当に感謝しています。私は実家生だったので、こんなにも恵まれた環境で、夢を叶えるため、4年間応援してくれた両親には感謝の気持ちでいっぱいです。

私を支えてくださったたくさんの人への今までの感謝の気持ちを忘れず、4月から社会人として頑張りたいと思います。そして、働いてからも常に向上心を持ち、自分自身を成長させていきたいです。4年間本当にありがとうございました。





卒業にあたって

看護学科第13期生 増田 彩

国家試験を終え、卒業を迎える今、大学生活の4年間はとても短くあっという間だったように感じます。

まだ雪の残った寒い旭川で入学式を迎えた4年前の春。長く暮らしてきた実家を初めて離れ、大学生活は期待と不安でいっぱいでした。看護とは何かということから始まった看護学の授業。テストやレポートに追われ、また、実習では常に悩み、自分の知識・技術不足が悔しく涙したこともありました。この4年間は慌ただしく、しかしとても充実していたものだったと思います。

この4年間で振り返ると様々な思い出があります。その思い出の中には、常に13期生のみんなの姿がありました。授業が終わった後も遅くまで技術チェックの練習を行ったこと、実習の記録が終わらなくゼミ室やリテ室で話しながら夜遅くまで残ったこと、テスト中や国家試験前に図書館で励まし合いながら勉強したこと、実習中にもかかわらず学祭のためにAKBを踊ったこと、DVDを見ながら騒いだこと、寒さに震えながら夜遅くまでテニスしたこと。この4年間笑い合い、励まし合いながら過ごしてき

た同期の仲間は私にとってかけがえのない存在です。縁があってこの旭川医科大学で同期に出会えたこと、同期と共に学べたことを嬉しく思います。卒業後はそれぞれが違う場所でそれぞれの道を進んでいくこととなります。毎日共に過ごした仲間となかなか会えなくなると思うと寂しいですが、4年間共に過ごした同期がいることは、今後何かの壁に直面した際に乗り越えるための大きな力になると思います。旭川医科大学で学んだこと、同期との思い出を糧に、これから先も患者さんの訴えを「聴ける」看護師になるために日々精進していきたいと思っています。

最後になりましたが、私たち学生にいつも温かくご指導いただいた先生方、実習でお世話になった指導者さん、患者さん、いつも笑顔で迎えてくれた軟式テニス部のみんな、私が選んだ道を応援してくれた家族、そしていつも一緒にいてくれた13期生のみんな、学生生活を支えてくれた全ての方にこの場を借りて感謝したいと思います。4年間、本当にありがとうございました。





1年間を振り返って

医学科1年 矢口陽介

2011年3月11日、未曾有の大災害である東日本大震災が発生した。その翌日、震災のニュースを一晩見続けたためか、何とも言えない不安に包まれながら、後期日程の入学試験を受験した。結果は合格であった。

入学式では、多くの命が犠牲になった震災のことを思い、将来医療職につく身として改めて心を引き締めた。学生の間はまだまだ無力である。そう思いながらも6年後に思いを馳せた。

この6年間での、目標は2つである。1つは当然のことながら、勉学である。医学部によく入学することができ、勉学に対してのモチベーションは十分であった。反省はいろいろあるけれども、充実した勉強ができたと思う。

もう一つは多くの人と出会うこと。医科大学という単科の大学では、普段会う人間がどうしても限られてしまう。そうならないためにも、様々な人間に出会いたいと考えた。多くの人と出会うための活動としては、学外、学内の両方の活動に力を入れた。

学外の人間との活動としては「国際医学生連盟日本(IFMSA-JAPAN)」や「はしっくす」を行った。「国際医学生連盟日本」では、全国各地の医療系学生と出会い、活動を共にした。「はしっくす」では、旭川の他大学（教育大旭川校や旭川大学など）の学生とともに旭川の地域活性化について取り組んだ。活動を通して、旭川市の職員の方やNHKの方やNPOの方とも出会い活動を支えていただいた。

学内の活動でも非常に多くの方と出会えた。「地域医療について語る会(CIK)」や「Med-Edu」では魅力ある先生方や先輩方に出会えた。「雪艇倶楽部(カヌー部)」でも、北海道の大自然を満喫しながら、パワフルな先輩方と活動が出来た。

こうした大震災から始まった一年であったが、これらのつながりから非常に多くのものを得た。人のつながりの大切さを再確認できた一年であった。これらの出会いに感謝するとともに、来年度へのモチベーションとしたい。





一年を振り返って

医学科1年 森 勇 喜

昨年、前期試験を突破して旭川医科大学に入学してから、瞬く間に1年が過ぎ去っていきました。不安と期待が交錯する中、旭川での一人暮らしの生活が始まりました。

私の場合、高校の時の先輩や予備校時代の友達が大学に居たため、まったく知らない人たちが生活している中に飛び込むということではなかったのですが、入学したての頃は新しい環境になかなか順応できず、悩む日々が続いたときもありました。そのような中で、徐々に友達ができたり、先輩に助けていただいたりして、段々と環境に馴染んでいくことができました。

この1年を振り返ってみると、私の生活は部活動が中心でした。部活動はハンドボール部に所属していますが、高校から競技経験があったということもあり、1年生ながら試合に出させてもらえて、良い経験をさせてもらいました。秋学連では、学生リーグ2部優勝を果たすことができました。今年はさら

に良い成績を残せるよう個人はもちろんですが、チームとしても努力していきたいと思います。また、学業の面では、入学したての頃はどのように勉強したら良いかがまるで分からず、授業について行くのがやっとで、テストで良い点数を取ることがあまりできませんでした。しかし、テストを何回か経験していくと、段々と要領が分かってきて、後期の試験の時には効率よく勉強を進めることができました。

今年は、2年生ということで、勉強のレベルが1年生の頃と比べて格段に上がると考えられます。先輩方が勉強している様子を見たり、先輩方の話を聞いたりすると、かなりきつそうです。しかし、先輩方は全員進級しているし、「部活をしているから」という理由で学業をおろそかにはできません。今年は、昨年以上に学業に力を注ぎたいと思います。また、春には後輩ができるということで、先輩としての自覚を持ち、後輩たちに少しでも何かを残せるように努力したいと思います。





1年間を振り返って

看護学科1年 小谷理恵

この一年はあっという間に過ぎて行きました。今振り返ってみると、4月に入学してから授業や、部活動、早期体験実習など、その他にもたくさんのことを一気に経験出来たような気がします。入学したばかりの頃は右も左もわからない状態で自炊と勉強と部活を両立させていくのに精一杯でした。しかし先輩にアドバイスを頂いたり友達に助けってもらったりしながら徐々に慣れて行きました。慣れてきた頃から日を追うごとに大学生活が楽しくなっていたと思います。特に、友達や先輩と色々な事をして人とのつながりが広がっていったことは私にとって大きな収穫でした。放課後ご飯を食べに行ったり、買い物をしたり、誕生日を盛大に祝ったりなど、中学・高校時代では存分に楽しんでこれなかったことが今できて、受験勉強を乗り越えて本当に良かったと思います。自分自身大きく考え方が変わったと思うのはやはり学問の分野です。今までは目標が受験で合格することだったので、姿勢ややり方が違いまし

たが、大学での勉強はすべて将来につながっているものでとても興味深いものでした。まだ1年間しか勉強していないのでまだまだですが、自分から学んでいくことの大切さをこの1年で学べたと思います。たくさん勉強しなくてはいけないですし、課題やテストも大変ですが、日々勉強していくうちにその奥の深さを知ることが出来て、まだまだ努力が必要なことを知ると同時に、これからへの意欲がわく1年でもありました。

1年間を振り返ってみて、一番思うのは今まで自分がいかに狭い世界しか見てきていなかったかということ、そして大学に入ってから少しずつ視野が広がってきた、ということです。大学に入って沢山の人や仲間と出会い、いろんな価値観に触れることは私にとって貴重な経験となりました。大学1年生の1年間は、私にとってとても大きなものでした。これからも様々なことに挑戦して充実した大学生活を楽しみたいです。





1年間を振り返って

看護学科1年 西尾和音

私が旭川医科大学に入学してから、早いもので1年が経とうとしています。この1年間を振り返ってみると、最初の頃は新しい環境での生活に不安や緊張もありましたが、優しい先輩や友人に恵まれ、内容の濃い1年を送ることができました。もちろん、試験や課題に追われ大変な時もありましたが、それ以上に仲間と過ごす日々はとても充実しており、あっという間だったように感じます。

大学での勉強では、高校のように先生が何でも教えてくれるわけではないため、自分から積極的に学ぶ姿勢というのが大切だと実感しました。専門的で難しい教科もいくつかありましたが、自分の夢のためだけではなく、将来の患者さんのためでもあると思うと頑張ることができています。特に、7月に行われた基礎看護学実習では、実際に患者さんに接することで、多くのことを学び、勉強に対するモチベーションが高まりました。学年が上がるにつれて勉強は難しくなると思いますが、教科書の先にいる患者

さんを意識して学んでいきたいと思います。部活では、初心者で合唱部に入りましたが、先輩たちに教えてもらいとても楽しく活動しています。年齢に関係なく色々な人と関わることができ、一緒に遊んだり、実習や授業の話を聞いたりすることもできて、自分の大学生活で欠かせないものの1つとなりました。これから後輩が入ってくるのも楽しみです。また、大学生になって初めてバイトを始めましたが、今のところ勉強や部活とも両立ができていると思うので、この状態を維持していければと思います。

この大学での生活は自分が思っていた以上に充実したものとなっていますが、こうした1年が過ぎせたのは、なにより同じ夢を持った仲間のおかげだと思っています。これからも人との出会い・関わりを大切にし、すてきな仲間とお互いに励まし合い成長しながら、充実した大学生活を送っていききたいと思います。





回 想

化学 教授 中 村 正 雄

前任地の札幌から旭川に移り住んで17年目になります。この間、旭川は地方の中都市として整備されつつあるように思います。現在の旭川の人口35万人余りは、街が人口増加または減少に向かう分岐点。この人口規模は、若者に必要な娯楽や就職口が最小限あるが、彼等をより惹きつけるものがないと次第に減少に向かうとのことでした。

以前の大学では、大学院の研究科に所属し、指導していた院生達と一緒に研究とスポーツをする毎日でした。研究分野は生化学で屠場や農場から実験材料を入手し、せっせと研究対象の酵素やタンパクを精製しました。したがって、一連の精製と実験が開始すると、体力と集中力の要求される、お世辞にも綺麗と言えない日常でした。評価は明瞭で、それなりに充実していた日々でした。しかし、時代はバブル期に差し掛かり、拘束時間が長く、3Kの職場は院生達から敬遠され始めていました。旭川医大に赴任した年、看護学科の創設が決まり急遽入試に協力を求められました。実習の看護学生達はとても意欲的でした。赴任直後の戸惑いは新入生とどう接するかでした。旭川医大にはまだ、編入学、AO入試も導入されておらず、年齢の高い受験生に寛容との評判でした。初めて学年担任を担当し、新入生達の面接をすると、ジャーナリスト、社会人、研究職経験者など私よりも成熟した方達がおられ、彼らから教育に示唆を受けることが少なくありませんでした。前任の総合大学では大学院大学への移行に伴う資格審査、研究所の外部評価、事務系職員の統合などがすでに進行していました。赴任してから、旭川医科大学にも改革の荒波が押し寄せてきました。道内大学の統合案、法人化、入試改革などです。背景に日本の経済危機やグローバリズムへの世界的な流れがあります。研究、教育レベルも国際レベルに対応せざるを得ません。一般教育でも新しい入試選抜方法の検討、また新入生の準備教育や急速に進んでいる生

命科学教育への対応などが求められ続けています。

昨年入試の作業中に東日本大震災を経験しました。海外にいち早く流れた映像がショッキングであったためか、留学時代のポスドク仲間達からメールで安否確認の連絡がありました。その留学中にもチェルノブイリの原子炉事故が起こり、放射性物質のヨーロッパへの拡散が危惧されました。当時イタリアから留学していた女性は、母国の幼い姪や甥のためにアメリカ産の安全な乳製品を彼等に送っていました。いまだに人類は核燃料サイクルを含め、安全な原子力利用技術を確認していないこととなります。

私は、研究者としては峠を過ぎて、本学へ着任しました。早々に、基礎と臨床講座の方に共同研究の声をかけていただき、研究を継続することができました。特に私の分野で大切な研究対象である遊離基を、直接観測可能な電子スピン共鳴装置（ESR）と質量分析機が、当時の実験実習機器センターに配備されていたので、容易に実験を開始することができました。その後、先端機種種の更新が医大研究者の間で待ち望まれていたのですが、予算の都合で実現が困難でした。しかし、3年前に補正予算を獲得していただき、新しい装置が購入されたのは幸いでした。

雪が解ける頃になると、6～7年前から、美瑛川の堤防を自転車で走ることが週末の習慣になりました。間もなく、秋口に野生の若い鹿を茂みに見かけました。こちらに気が付き、やがて走り去って行きました。昨年は暮れかかった夜空高く、白鳥が渡っていくのを見かけました。旭川の近郊にはまだまだ、これまで気付かなかった美しい自然が隠されているようです。

在職中お世話になった教職員の皆さまに、お礼申し上げます。また学生の皆さん、どうか目的に向かって悠々と急いでください。



14年近い講座主任としての 活動を振り返って

寄生虫学講座 教授 伊藤 亮

1998年6月1日付で着任し、早いもので本年3月末に定年を迎えることとなります。お世話になりました。「地域に根差し、世界に発信する」を基本戦略として研究、教育、さらに臨床講座における診断・検査に協力する形の講座運営を行ってきました。研究では難治性、致死性寄生虫疾患であり、北海道の地方病でもある「エキノコックス症」（多包虫症）と、豚肉消費の発展途上国から先進国への流行拡大が深刻化してきている「脳囊虫症」に絞り込んだ研究を教室員一丸となって展開できたことに感謝します。両疾患はテニア科条虫に含まれる病原性が非常に高い寄生虫の一群によって引き起こされ、地球規模で流行が拡大しています。その一つが北海道の地方病ですから、最高の研究環境を与えていただいたこととなります。教育では人類の地球規模での活動を通して、予期されない寄生虫疾患に遭遇する危険性が高くなっている現実に対する理解を深める現場中心の講義を展開してきました。臨床各科からの診断・検査相談については、学内外、国内外（米国CDCを含む）を問わず、最優先の活動として万全の体制で対応してきました。予期せぬ面白い症例への遭遇の期待もあり、すべて無償で検査してきました。迫康仁博士（現講師）の指導下で検査を実施し、記録してきたのは臨床検査技師で技術補助員の伊藤園予さんです。感謝です。

外部資金獲得でも文科省科研費（基盤A国際共同研究、海外調査、13年間）、科学技術振興調整費（3年間）、アジア・アフリカ学術基盤形成事業費（6年間）、科学技術戦略推進費（3年間）、北海道橋渡し研究費（5年間）、特定研究費（2年間）、地域連携研究費（2年間）、厚生科研費（7年間）、米国立衛生研究所RO-1研究費（8年間）をいただき、約5億円の公的外部資金を得たこととなります。講座での外部資金は小さなもの、分担分を含め講座で毎年5～8案件あり、その事務作業はすさまじい量でした。事務職員の盛眞智子さん（現看護学事務）、非常勤事務職員の酒井まゆみさんには大変お世話になりました。また、本学での私の研究活動を常に温かく見守ってくださった歴代の学長、特に第5代学長、久保良彦先生のご恩も忘れることはできません。

医学部講座での研究活動として、上記の難治性寄生虫疾患に関する免疫、遺伝子診断法の開発を看板

として展開できたことは優秀な教室員の協力の賜物です。旭川から世界に発信することの困難さは誰しもが直面し、痛感し、しかし挑戦し続けなければならない課題でしょう。迫博士が私の着任1年後に助手として参画し、遺伝子組み換え抗原（RecEm18）をあっという間に作製し、その分子特性を解析し、世界と勝負できたことは幸運でした。中尾稔博士（現准教授）の分子分類学的研究も全世界から研究材料をいただけた幸運と中尾博士自身の素晴らしい能力とたゆまぬ努力により、大きく進展しました。柳田哲矢博士（現助教）は遺伝子診断法などの日常的な検査を通して、感染地の推定が可能な研究、さらにこれらの寄生虫の地理的起源に迫る研究を展開しています。動物実験施設の中谷和宏博士（現准教授）にも感謝です。多忙な日常的業務をこなした上で、エキノコックス症実験動物モデル開発などの研究を展開してくださいました。また第3内科出身の研究生、石川裕司先生にも感謝です。学内の多くの同僚教授にも大変お世話になりました。

愚直な人間が旧帝国大学その他にはほぼ予算がつくことが内々に決まっている比較的大型予算獲得に招かれざる客として挑戦し、「旧帝国大学に一極集中化させるのではなく、地方大学、単科大学をも含める形で国内全体での“研究の底上げ”と“危険の分散”が必要である」と提言し、7度の申請すべてが1次審査を通り、4案件が採択されたこと、さらに定年を直前に、これまでで一番大きな予算（2億6千万円）申請の機会が初めて文科省側から内々に提示されたこと、定年後の人材活用を全く想定していなかった本学執行部の指導下で代表を降り、初めて門前払いを食らったことも懐かしい思い出です。文科省がそれなりの評価を与えた研究者の定年後の公的研究活動を支援できる柔軟な運営と資金の確保が可能になる時代が本学にも遠からず訪れることを祈りたい。

医療ビジネスに優れた才覚を有する吉田晃敏現学長のもと、医療機関としての本学の存在が広く知らしめられつつあることは良いことです。borderlessの時代に対応できる医療活動だけでなく幅広い医学研究が展開できる環境整備を期待します。事務局の皆様にも大変お世話になりました。本学の健全なる発展を祈念します。



定年退職にあたって

看護学講座 地域保健看護学 教授 北村 久美子

平成9年4月1日に、看護学科が開設されてから1年後、現看護学講座の地域保健看護学担当の助教授（現准教授）として採用され、平成24年3月31日をもって定年退職をすることになりました。

これまでの15年間、毎日が新鮮で、日々、未知への挑戦をたっぷり体験させていただきました。この間、大変多くの皆様から温かいご指導、ご支援を賜りながら仕事をさせて頂くことができましたことに心より深く感謝申し上げます。例えば、平成5年秋、元清水哲也学長先生からの1通のお電話をいただかなければ北海道知事の命を受けて他施設に転勤になるところでした。道庁の人事担当者に即刻、お電話の内容を申し上げると「北村さん、これからの看護教育は4年制の時代だから・・・」と強く背中を押して下さいました。当大学で定年退職を迎えられるのは、お二人の恩人のお陰と感無量の気持ちで一杯です。

着任早々のことですが、通年の授業、演習、翌年の実習開始準備など思い巡らせ仮住まいの部屋から建築中の看護学科棟を眺め希望に胸を膨らませていましたら、6階の空間を地域保健看護学実習室にするので「どのような教育をするのか」「どのような実習室の作りにしたいのか」即刻、計画するように仰せつかりました。教育の構想を練り計画書を持参し緊張しながら施設課長のヒヤリングを受けました。完成した実習室は高級な建材を用い構想通りで、「国立旭川医大はすごい!!、さすが文部科学省!」と感激し、教育に対する情熱が沸いてきたことを鮮明に思い出します。今もJICA研修など多目的に使用中です。同様に着任早々、看護の大学教育に身を置き右往左往していたにもかかわらず現教務厚生委員を5年間拝命しました。この間いろいろなことに遭遇し経験を深める機会となりました。医学科教育課程編成小委員会のメンバーになり平成11年度から実施の早期体験実習の立ち上げという貴重な体験をさせていただきました。看護学科学も21年度改正カリキュラムにより医学科学生に加えて頂き合同で早期体験実習Ⅰが実施されることになりました。

教育の面では、当初、大学教育には一抹の不安がありました。前任地で看護師教育と保健師教育に携わり、厚生労働省主催の看護師養成所教員（6ヶ月）、保健師養成所教員（1年）研修をいずれも東京の地で受講機会に恵まれ、看護と教育の本質を学び多くの示唆を得ていたことも非常に役立ちました。お陰様で学生の皆さんと共に学び育てていただいた15年間でした。第1期生から数えて総数900人以上の学生に、主に保健師教育課程の講義、演習、実習をしてきたこととなります。卒業生は、医療機関、行政機関などに就職し看護職者として立派に成長し後輩の実習指導の役割を担い活躍している姿を見て頼もしくうれしく思います。

研究の面では、北海道在宅福祉推進検討会で全道各地を回り保健・医療・福祉関係者をはじめ地域住

民とより充実した保健医療福祉のネットワークづくりに向け研究協議を行った体験を基に、「介護保険制度創設前のこともあり「認知症をめぐる法的諸問題」に、さらに認知症高齢者をめぐる地域包括ケア体制づくりは早急な課題であると考え、先進国イギリスの「National Health Service and Community Care Act 1990」の研究に取り組みました。この法律は、コミュニティで住み続けたいという国民の意思などを反映させており、保健医療と対人福祉サービスを連携させながら、地域基盤を主体として展開していくという考え方に深く共感しました。最近は、全国の学会発表を機に共同研究者のお誘いをいただき、「看護学士課程における島嶼看護学教育の効果と課題に関する研究」に取り組みできました。

管理・運営面では、看護学科部局責任者を平成17年度から22年度の6年間務めさせて頂き、この間2度にわたる看護学教育カリキュラム改正に取り組みました。平成20年度教育センター立ち上げの際に共通性のあるものは同じ土俵の上でお願い各種部門委員の構成員に看護学講座の教員も加えていただき、学生の教育・運営にも良い結果をもたらしました。また、文部科学省19年度「がんプロフェッショナル養成プラン」が採択され、がん看護専門看護師養成コースを本大学大学院医学系研究科に開設することができ、平成22年2月日本看護系大学協議会からがん看護分野の専門看護師教育課程と認定されました。平成21年4月に大学院生を迎え必要な課程を経て平成23年12月にがん看護専門看護師の誕生という朗報をいただきました。このことについては、道内外の多くの先輩諸姉、関係者の皆さまのご支援、ご協力の賜と心から深く感謝申し上げます。今後、さらに他分野の専門看護師教育課程の開設へと発展していくことを切に願っています。

社会活動として、JICAの研修事業では、母子保健人材養成を平成15年度から本年度までの9年間で合計93名、アフリカ地域保健行政官のための保健行政を平成20年度から本年度まで3年間で40名の研修生を世界各国から受け入れ、貴重な体験を重ねることができました。平成20年3月春休み、学生がアフリカのベナンに出かけ初年度来日した研修員と交流を深めてきた報告に接し嬉しくなりました。また、北海道地方障害者施策推進協議会委員、旭川市開発審査会委員、旭川市社会福祉審議会委員並びに高齢者福祉専門分科会委員長を務めさせて頂き、常に新鮮な現場感覚を持つことができ教育の面にも役立ったように思います。

最後になりますが、未熟ながらいろいろな経験をさせていただき感謝しますと共に、無事、定年退職ができますこと身に余る光栄に思います。旭川医科大学が日本の北に永遠に光り輝く大学であり続けることをお祈り致します。

長い間、本当にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

海外ボランティア診療に参加して

－ベトナムにおける口唇口蓋裂 無償治療に参加して－

看護学科3年 皆野 絵里奈

私がこの活動に参加した動機として、2つのことがあった。1つ目は、他国の医療や医療資源、患者さんとの関わりを見学し、比較することで看護について再考すること。2つ目は、ボランティア部の「サンタクロースプロジェクト」として集められたプレゼントを届け、自ら手渡し、その状況をご協力頂いた皆様に報告することである。活動に参加し、多くの方のご協力、ご指導を頂く中で私の目的を果たすことができた。また今回の活動を通して、特に以下の7つのことを学んだ。1) チーム医療について。今回参加したのは口腔外科医、麻酔科医、小児科医、形成外科医、看護師、学生を含めた計41名。全国各地から集まった集団が、この活動を安全に成し遂げるために協力していた。現地の限られた医療資源や設備を活用し、個々がお互いに気遣い、連携をとることの大切さを感じ、そのような現場を体験する中で、看護者としての役割を考えることができた。2) 初日に行った患者診察時、70名程の患者さんとそのご家族の一次診察後、写真、麻酔科、口腔外科、印象等の各部への誘導を担当した。言葉が通じない中でコミュニケーションをとることの難しさを痛感し、またこちらの雰囲気や笑顔、態度で患者さんに安心感を与えることの大切さを学んだ。今回の患者さんとの交流を通して、たとえ言葉が通じなくとも、暖かで誠実な姿勢で接することでお互いにその想いを伝え合うことができることが分かった。3) 患者さん宅の家庭訪問では3人のお宅を伺い、その生活の状況、価値観、文化の違いを知ることができた。また、急速に経済成長している一方で、都市部と農村部で拡大している貧富の差を感じた。そして、今後も無償の医療支援活動を継続する必要性やその担う役割の大きさを考えることができた。4) 障害児学園に訪問し、「サンタクロースプロジェクト」として集められたプレゼントを手渡した際、私たちを歓迎してくれる人々のあたたかさに触れ、また「サン

タクロースプロジェクト」として収集できたひとつひとつのものが子どもたちの笑顔となり、渡す度に「ありがとう」と伝えてくれる子どもたちの顔が印象的であった。学生という今の自分たちにできる方法で、少しでも支援に繋がることを身を持って体験し、今後の可能性について考えることができた。5) 手術を間近で見学し、器械出しや外回りの看護師の役割、重要性を実践を通して学ぶことができたことは大変よい経験となった。これまで講義や実習で学んでいたことを実際の現場で体験でき、さらに学びを深めることができた。また、通訳を通じてコミュニケーションをとりながら、現地の看護師さんにもご指導を受け、共に器械出しの仕事を行った。その中で、医療に関して日本と少し異なる考え方、方法があることが分かった。6) 医療機器や不足した物品は現地のを適切に活用しており、現地でする最大限の医療を工夫して行っていくことの大切さを感じた。また、手術の際は通訳者が不在の時にも現地の器械出しの看護師とコミュニケーションがとれるように、手術器具名をベトナム語と日本語で示した一覧表を作成し、活用した。その表を用いて現地の人と通じ合えた時、現地のスタッフも一丸となって、チーム医療を行っていると感じた。この方法を考案したのは松田教授で、こちらからコミュニケーションをとれる環境を整えることやその考え方、姿勢の大切さを学んだ。7) 看護学生は中央材料室で医療物品の整理と滅菌物の管理の補助をい、その仕事を通して、大学ではできない体験をし、活動を支える役割を担うことができた。また、その仕事の中で担当の看護師さんから貴重なお話を伺うこともでき、看護学生として患者さんとどのように向き合えばいいのか、患者さんのために何ができるのか、またこれからの患者さんとの出会い、関わりを通して学んでいくこと、さらに看護とは、喜びであることを学び、考えることができた。

今回、この活動に参加させて頂き、吉田学長はじめ大学の皆様に変感謝しております。このような活動の中で感じ、考えたことを忘れず、これからも看護について追求していきたいと思っております。

ありがとうございました。

海外ボランティア診療に参加して

ーベトナムにおける口唇口蓋裂 無償治療に参加してー

看護学科4年 黒木香織

日本口唇口蓋裂協会が1993年から毎年行っている国際医療援助の一環として、ベトナム社会主義共和国のベンチェ省で行なっている口唇口蓋裂の手術に学生ボランティアとして同行させていただいた。松田教授率いる旭川医科大学チームや北海道大学チームの他、愛知や九州など全国からチームが集結し、口腔外科医、麻酔科医、小児科医、口腔病理医、産婦人科医、看護師、学生の総勢41名での渡航であった。

現地での主な活動は、ベトナム人民委員会が事前に声かけをして集まった患者（76名）の診察、手術患者の決定、手術、術後管理であった。今回手術を行なった患者は49名で、手術室3室で一室当たり一日4件、計12～13件の手術を行なう、とてもタイトなスケジュールであった。学生である私の仕事は、診察での誘導、手術器具の滅菌や準備、中央材料室での物品管理や整備などであった。また、松田教授のお計らいで、手術中の直接介助も経験させていただいた。直接介助にあたっては、松田教授をはじめ、旭川医科大学病院と北海道大学病院の看護師に手厚くご指導いただいた。さらに、今回の活動では、看護師の参加が全国から5名と少数であったため、現地の手術室勤務のベトナム人看護師数名が、ほとんどの手術の直接介助にあっていた。そのため、私が直接介助に入らせたいただいた際には、その手術の担当であったベトナム人看護師にもご指導をいただいた。言葉の壁はあるものの、ベトナム人看護師たちは、それまでの経験と知識から、日本人看護師に劣らない素晴らしい直接介助をしており、その技術の高さに驚いた。また、現地では、手術の際の縫合などは看護師が行うことが多いということも教えていただき、実りのある貴重な体験ができた。

今回の医療活動を通して、日本の医療現場がいかに恵まれているのかを実感すると同時に、ベトナムの生活状況や医療事情を少しではあるが知ることができた。

急速に経済成長している傍ら、貧富の差は拡がり続けており、貧困のため病院にかかれず、適切な医療が受けられないまま放置されている子供達が大勢

いることにショックを受けた。特に今回訪れたベンチェ省は、ベトナム戦争による枯葉剤の被害を大きく受けた地域であり、児の先天異常の発生率が高く、口唇口蓋裂もその一つである。日本では考えられないことであるが、ベンチェでは口唇口蓋裂の手術を受けずに放置されている子どもたちが大勢いるのだと実感し、このような無償の医療支援の継続の必要性を痛感した。また、診察の誘導時に出会った忘れられない親子がいる。母と生後6カ月の口唇口蓋裂の女兒、9～10歳の児の姉である。親子3人で診察を受け、私が次の診察へ誘導しようとする、母から突然話しかけられた。「この子の口を見て！こんな風に産んでしまったのは私のせいなの。この子に申し訳ない。こんな風に産んでしまって、申し訳ない。」もちろんベトナム語であり、通訳もいなかったが、涙を流しながら私に訴えようとする母の言葉と申していることが理解できた。胸が苦しくなった。私はただ、母の背中をなで続けるしかできなかった。言葉は通じないが、「大丈夫、先生方が治してくれますよ！大丈夫、大丈夫！」と日本語で何度も伝えた。すると、それが伝わったのだろう。母は落ち着きを取り戻し、ほほ笑み返してくれ、握手してくれた。その後、一緒に診察を周り、無事に手術を受けられると決まった時の家族の嬉しそうな笑顔、手術を終えた後の安堵した顔を見て、この医療活動の意義の大きさを肌で感じる事ができた。

また今回の活動で、チーム医療の重要性を実感できた。昨日、今日、顔を合わせたメンバーが、海外で安全に手術を行なうためには、メンバー全員の協力が不可欠である。その中で、自分の役割をしっかりと認識し、それを遂行しながらもお互いに対する気遣いが活動を支えているのだと再認識し、チーム医療の素晴らしさを感じ取ることができた。

学生生活の最後に、この医療チームの一員としてこのような活動に参加できたことは、私にとっても今後の人生においても貴重な経験となった。

今回の参加に際しまして吉田学長、松田教授、また大学側には多額の助成金を頂き、大変感謝しております。これからは医療者として、積極的に仕事や勉強に取り組み、今まで私に勉強させて頂いた方々に感謝し還元していきたいと思っております。ありがとうございました。



初めての手術直接介助経験。
現地看護師と北大チームの
看護師さんが指導してくれ
ました

(看護学科3年：皆野さん)



ボランティア部から託されたプレゼントを、
クリスマスケーキとともに障害児学院の子供
たちに手渡している

(看護学科3年：皆野さん)



ボランティア部から託されたプレゼント
を、前年手術した患児に手渡している

(看護学科4年：黒木さん)



初めての手術室外回り経験。
ベトナム人看護師さんが見守っ
てくれます

(看護学科4年：黒木さん)



最終日、術後の患児が父親、母親と一緒に
『旭川なでしこチーム』を見送りに来てく
れました

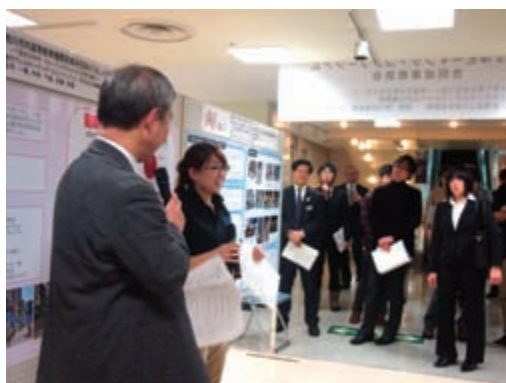
合同成果発表会

AWBC（旭川ウェルビーイング・コンソーシアム）の学生による合同成果発表会が、平成24年1月29日（日）に旭川市国際交流センター（フィール7階）で開催されました。AWBCは、旭川市内の6つの高等教育機関（本学、旭川大学、旭川大学短期大学部、北海道教育大学旭川校、東海大学旭川キャンパス、旭川工業高等専門学校）による大学連携組織であり、連携校の学生が、それぞれの専門領域における能力を発揮し、地域社会に貢献できる人材となるために行った活動成果を発表しました。

来場者および連携校の審査員による審査の結果、応募22作品中最も優れた作品に与えられる旭川ウェルビーイング・コンソーシアム賞を、本学学生が主体となっている学生自主組織「はしっくす」の作品が受賞しました。また、看護学科学生の作品が優秀賞、医学科学生の2作品および本学学生団体IFMSA、Med-Eduによる4作品が奨励賞を受賞しました（別表）。

また、学生が活動成果をまとめたパネルは、平成24年1月29日（日）から平成24年2月4日（土）まで旭川市国際交流センターに展示され、多くの市民の方に供覧されました。

旭川ウェルビーイング・コンソーシアム賞
2年間にわたる旭川中心市街地活性化プロジェクト「あったかいね旭川～つなげよう灯のわ～」における効果と課題の検討～市民の企画提案による協働のまちづくり事業に参画して～ 旭川ウェルビーイング・コンソーシアム 学生自主組織「はしっくす」 鈴木 美紗 ¹⁾ 、佐久間 寛史 ²⁾ 、内田 千晶 ³⁾ 、佐藤 裕基 ⁴⁾ ※1) 医学科4年、2) 医学科2年、3) 旭川大学、4) 医学科6年
優 秀 賞
改正臓器移植法に伴う臓器提供に関する中学生とその保護者の意識調査～脳死下で15歳未満の臓器移植が可能になったことを踏まえて～ 看護学科4年 渡部 大地、寺林 和哉、福澤 征爾
奨 励 賞
富良野地域における早期体験実習報告～地域医療とは～（医学科3年 阿部 紀之、他6名）
キッズの意識向上を求めて（IFMSA）
学生に対するピアエデュケーションを用いた性教育の効果について（Med-Edu）
学生による禁煙教育の実施とその効果について（Med-Edu）
中学生に対しての防煙教育と喫煙意識の地域差（Med-Edu）
旭川市内高等教育機関音楽系団体と「はしっくす」との連携による地域活性化の例―「あさひかわ ミュージックフェスタ」の取り組み―（はしっくす）
JR旭川駅 新駅舎オープンイベントにおける「はしっくす」の役割について（はしっくす）
ゴミを笑顔と花に（はしっくす）
マウス多発性硬化症モデルを用いた脱髄機序の形態学的解析（医学科6年 野村 太一）



各種保険について

○本学医学科学生が加入する保険の概要は、下記の図のとおりで①から③の3階建てとなっております。

③ 学生・生徒総合保険A・Bタイプ ※3階部分	
内容	傷害・損害賠償を24時間補償&針刺し事故を補償
補償金額	死亡補償金 Aタイプ・Bタイプ 300万円 対人賠償 Aタイプ・Bタイプ 1億円限度 対物賠償 Aタイプ・Bタイプ 1億円限度 感染予防費用 保険期間中50万円
掛金	別表のとおり。
加入	医学科第1～4学年の4年間は任意加入ですが、臨床実習が4学年後期からあるために2年2月間の保険加入を義務付けています。なお、入学時に6年間加入をしてもかまいません。 ※学生教育研究災害傷害保険(学研災)及び医学生教育研究賠償責任保険(医学賠)に加入していること。
② 医学生教育研究賠償責任保険(医学賠) ※2階部分	
内容	正課中、学校行事中、通学中に、他人にケガをさせたり、他人の財物を壊したことにより被る法律上の損害賠償を補償
補償金額	対人賠償と対物賠償合わせて1事故につき1億円限度
掛金	6年間 3,000円 5年間(編入学生) 2,500円(1年間500円)
加入	入学時加入を義務付けている ※学生教育研究災害傷害保険に加入していること
① 学生教育研究災害傷害保険(学研災) ※1階部分	
内容	正課中、課外活動中、通学中及び学校行事中に本人が傷害等の事故にあった場合。 臨床実習中に接触感染症予防措置を受けた場合。
補償金額	死亡補償金 正課中 2,000万円 課外活動中 1,000万円 傷害補償金 正課中 治療日数1日から 通学中・学校施設等相互間の移動中 治療日数4日以上から 課外活動中 治療日数14日以上から 入院 1日 4,000円 接触感染症予防保険金 臨床実習中 1事故につき 15,000円
掛金	6年間 4,800円 5年間(編入学生) 4,130円
加入	入学時加入を義務付けている

詳細については、学生支援課学生係にお尋ね願います。

本学では、学生諸君の学生生活及び日常生活に対して上図のような保険を用意して、加入を薦めております。

- ①学生教育研究災害傷害保険(学研災)は、学生生活中に負った本人の傷害等の保険です。加入を義務付けております。
- ②医学生教育研究賠償責任保険(医学賠)は、学生生活中に他人から損害賠償を求められた場合の賠償補償保険です。加入を義務付けております。
- ③学研災付帯学生生活総合保険A・Bタイプは、日常生活24時間をカバーする傷害保険と賠償補償保険です。
医学科第1～4学年の4年間は任意加入ですが、臨床実習が4学年後期からあるために2年2月間の保険加入を義務付けています。なお、入学時に6年間加入をしてもかまいません。

○平成24年に入学する本学看護学科学生が加入する保険の概要は、下図のとおりとなります。

(1) 看護学科学生Will 2 保険(看護学科学生対象)

本保険は、正課中、学校行事中、課外活動中及び通学中における事故により、学生本人が身体に傷害を被ったとき、また、他人を負傷させたり、他人の物を壊したことによる法律上の損害賠償を補償し、実習中における感染予防措置費用等を補償する保険です。この保険は、加入を義務付けております。

① 看護学科学生Will 2 保険	
内容	傷害・損害賠償を24時間補償及び実習感染予防費用
補償金額	死亡補償金 236万円 対人賠償 1事故 1億円限度 入院保険金 5,000円 対人賠償 1事故 1億円限度 通院保険金 3,000円 感染予防費用 50万円限度
掛金	4,500円(1年間)
加入	本保険は、大学として加入を義務付けております。なお、契約期間が1年間のため本学では、入学時に4年間分また、編入学生は2年間分の保険料を入学時に徴収し、大学として契約手続きを行います。また、契約更新時も大学で手続きを行います。

平成24年度日本学生支援機構奨学生の募集について

日本学生支援機構は、優秀な学生で経済的な理由で就学困難な者に学資を貸与しています。

本学では、日本学生支援機構からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本学生支援機構へ推薦します。ただし、日本学生支援機構では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

平成24年度の募集説明は4月12日(木)午後5時から看護学科大講義室において実施します。希望者は必ず出席してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、学生支援課学生総務係に相談してください。

平成24年度看護学科学生に対する奨学資金の貸与について

本学では、看護学科に在籍する学生に対して経済的支援を行うことにより、学習に専念できる環境の整備を図るため奨学資金を貸与しています。

奨学資金の概要はつぎのとおりです。

- 貸与対象者 看護学科学生
- 貸与月額 35,000円
- 返 還 貸与を受けた期間と同等の期間内に、一括または分割で返還
- 返還免除要件 被貸与者が卒業後直ちに、本学病院に常勤の看護職員として勤務した場合は、勤務月数に相当する月数分の返還を免除

貸与を希望される方は、看護学科事務室へお越しください。申請書等をお渡しします。

申請書配布 平成24年4月2日(月)～

平成24年4月20日(金)

申請期限 平成23年4月27日(金)まで

なお、在籍者(休学者又は留年者は除く)についても、貸与の申請を毎年行うこととなっております。ご注意ください。

授業料未納による除籍について

授業料を2期滞納し所定の期日までに納入されない場合には、除籍となります。

この取扱いは、平成17年度から適用されていますので、平成24年4月1日において授業料を2期以上滞納している場合、平成24年9月30日をもって除籍

となります。

以後授業料納期である6か月ごとに適用されますので、授業料の支払計画をきちんと立てるようご注意ください。

学生団体の「継続届」「設立届」の提出について

平成24年4月以降に学生団体活動（部活）を継続する団体の責任者は、平成24年4月27日（金）までに「学生団体継続届」を学生支援課学生総務係に提出して下さい。なお、継続届を提出しない団体は活動を停止したと判断し廃部とします。

また、新規に学生団体の設立を希望する学生は平

成24年4月27日（金）までに学生支援課学生総務係に「学生団体設立届」を提出して下さい。なお、設立届の提出時に活動内容等に関する説明を求める場合がありますので「活動内容が同じ様な団体がある」等、安易な団体設立は避けて下さい。各届出用紙は学生支援課にあります。

インフォメーション

- | | |
|----------|---|
| 4月9日(月) | 平成24年度 入学式 (10時00分) |
| 4月10日(火) | 医学部医学科・看護学科新入生合同研修会(第1日目) |
| 11日(水) | 医学部医学科・看護学科新入生合同研修会(第2日目) |
| 4月14日(土) | 新入生歓迎実行委員会主催 部活紹介 新入生歓迎合宿 |
| 4月12日(木) | 学生定期健康診断 医学科第4学年 看護学科第3学年 |
| 18日(水) | 学生定期健康診断 医学科第1学年 看護学科第2学年 |
| 24日(火) | 学生定期健康診断 医学科第3学年 看護学科第1学年 |
| 5月9日(水) | 学生定期健康診断 医学科第2学年 |
| | ※医学科第5学年・第6学年、看護学科第4学年および大学院生また
外国人留学生は、上記日程の都合の良い日に受診すること。
※受付けの際に、必ず学生証を提示してください。
(学生玄関ホール 受付時間 12時30分～14時30分) |
| 6月8日(金) | 大学祭「医大祭2012」(前夜祭) |
| 9日(土) | 大学祭「医大祭2012」(一般公開 第1日目) |
| 10日(日) | 大学祭「医大祭2012」(一般公開 第2日目) |